ばってん

事務長会報第30号
平成23年10月1日
長崎県公立学校事務長会
長崎北陽台高等学校内
〒851-2127
長崎県西彼杵郡長与町高田郷3672
電話 (095)883-6843

ホテルセントヒル長崎
TEL 095-822-2251
長崎市筑後町4番10号

事務長さん方、力を合わせて、頑張っていきましょう。

会長（長崎北陽台高等学校） 田 渕 雄 三

はじめに、3月11日に発生した、東日本大震災において、尊い命を失われた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、御遺族と被災された方々に、心からのお見舞いを申し上げ、被災地の一日も早い復旧･復興をお祈りいたします。

さて、大震災後の電力需給逼迫に対応した節電対策等の取り組みも一段落し、会員の皆様には、ますます御清祥にて、職務に精励されていることと思います。

4月の春季総会において会長に選任されてから、6ヶ月が経過しましたが、この間、事務実態調査や、学校令達工事の設計に係る共通費積算の取扱等の問題が舞い込み、その対応に追われましたが、どうにか収束させることができ、少しホッとしたところです。

改めて、自分の経験のなさ、勉強不足を痛感し、反省しているところです。

さて、8月4・5日に東京都で開催された、第35回全国公立学校事務長会の研究協議会・総会に出席しましたが、今回は、一部の日程が全国特別支援学校事務長会との共催になっており、今後、両組織の統合に向けた協議が進められていくものと思います。

また、平成23年度の全国公立学校事務長会の活動計画のトップに、「事務長の職務・職制の法制化」、「学校事務組織の整備拡充」について、継続して研究し、関係機関に要望するということが記載されております。

事務長の職を法制化することにより、職務権限を確立させ、併せて処遇の改善（管理職手当の支給）等が図られることを求めていくというもので、全国事務長会の設立当初からの懸案事項ではありますが、これまでの全国事務長会の活動状況と文部科学省の対応状況から、早期の実現は難しいように思われます。

また、平成23年度の事務長に関する全国基本調査によりますと、事務長の管理職手当支給人員率は、平成13年度以降連続して70％台となり、課長級と課長補佐級の事務長の割合も減少傾向にあり、約8割に留まっているということです。

本県においては、先輩諸氏の御尽力により、昭和43年に管理職の指定を受け、現在、全員が課長補佐級以上に処遇され、全員に管理職手当が支給されていますので、事務長へ任用される年齢が遅くなってきてはいますが、処遇や手当の面では、恵まれていると言えるかと思います。

次に、文部科学省講話の中で、今年7月に「学校運営の改善の在り方等に関する調査研究協力者会議」から提言があった「子どもの豊かな学びを創造し、地域の絆をつなぐ～地域とともにある学校づくりの推進方策～」についての説明がありました。

この提言から、事務長にも関わりのある、これからの学校経営に求められるキーワードとして、「学校と地域社会の連携」と「学校の組織マネジメント」があるのではないかと思いました。

「学校と地域社会の連携」については、これまでも教育論としては、よく言われてきましたが、今回の、東日本大震災発生時の対応や、その後の復旧に向けた取り組み、避難所の運営等への対応の差から、常日頃からの地域社会との関係づくりが、特に重要だということのようです。

このことからも、学校と地域社会との窓口である事務室、とりわけ、事務室の責任者としての事務長の果たす役割が、これまで以上に重要になるのではないでしょうか。

また、「学校の組織マネジメント」については、学校経営の最高責任者である校長の強いリーダーシップの下で、学校経営のビジョンを示し、教職員とのコミュニケーションを図りながら、学校が組織としての力を発揮できる体制を構築することだと思いますので、一義的には、校長の手腕にかかっていると思います。

しかしながら、教頭と事務長は車の両輪と言われるように、教育指導部門を統括する教頭と、行政・財務部門を統括する事務長は、常に協力しながら、学校の経営者である校長をサポートし、学校経営の一翼を担う必要があります。

私たち事務長も、行政事務のスペシャリストとしての誇りを持って、学校の経営責任者である校長をサポートをしながら、校長の掲げる学校努力目標等が達成できるよう、積極的に学校経営に参画していかなければならないと思いますが、いかがでしょうか。

また、本県事務長会の「目的」は、「本県学校教育の一層の充実発展を図るため、時代の変化に対応した学校事務の改善と自らの資質の向上に努め、会員相互の連携を深める。」となっています。

私も、会長として微力を尽くすつもりでおりますので、会員の皆様も、この目的が達成できるよう、お互いに力を合わせ、頑張っていきましょう。

学校と趣味の関係？

佐世保南高等学校　本村保彦

鹿町工業高校の軟式庭球部の生徒達が手を振ってくれている姿を、引っ越し荷物を積んだ2トントラックのバックミラーで見送りながら長崎へ向かったのが昭和５９年３月末、それから教育委員会事務局での勤務を続け今年の春、久しぶりの学校へ赴任することとなった。実に２８年ぶりの学校である。新任の事務長として着任したのは、長崎からハウステンボスを通過して佐世保市の南に位置する佐世保南高校、普通科１８クラスの進学校であった。

最初の高校が工業高校で、その後は教育委員会事務局しか経験していないため、唯一の経験を思い出しながら学校生活の半年を過ごしたが、普通校での勤務は、新鮮な驚きが連続することとなった。鹿町工業高校は、ほとんど男子校と同じであったことから、まず、一番は「女子生徒がいる」というあたりまえのことであった。男子校を経験した人なら分かってもらえると思うが、男子ばかりの中にいると一人の女子生徒がいるだけで、不意をつかれてびっくりしてしまう（当時は、化学工学科と電子工学科に女子生徒が数名いたし、まだ独身だったこともあるかも？）。普通校では男子と女子がいることはあたりまえで、やはり男子校とは華やかさの点で違うと思う。バトンクラブもあればブラス部もあり女子生徒達が生き生きと活躍する姿は、男子校とは違う校風であろう。一方、工業高校では、卒業後はすぐに就職する生徒が多いことから、社会人になる前の少し大人びた雰囲気が全体に感じられたことが思い出される。施設についても工業高校の実習中心の形態と進学を目的とした座学中心の施設では、ずいぶん違いがあるものだと元施設担当者としては感心して見ている。

佐世保南高校の特色の一つには、英語学習を含めた国際理解教育の推進があり、１年生の希望者を対象とした海外短期研修や２年生での中国への修学旅行がそれである。世界は、通信機器の発達や移動手段の高速化から、まさにグローバルな世界に変貌してきており、昔は、遠い世界の関係ない話であったものが今や、即座に生活に影響を及ぼす事態となってきている。これからの若者は、いやがおうにも他の国の若者との国際競争の中に放り込まれることになる。そのための準備として、若い感性を持っているうちに外国の実情を経験し知っておく必要があるのではないか。昨今の留学する若者が少なくなっていることはいかがなものか。

私事ではあるが、趣味の一つとして海外旅行がある。まだ、多くの国を訪れたわけではないが、確かに「百聞は一見にしかず」は、現地に行って実感する。我が家でも子供が小さい頃から、４回の家族旅行の結果、勉強嫌いだった長男は高校卒業後、思い切ってオーストラリア留学、その後アメリカを経て帰国後、再度大学で学んでいるが、今はそれなりに成長し、もし留学しなかったとしたらどうなっていたものかと案じられる。心配した彼だが、今では彼の友人のおかげで海外旅行の恩恵にあずかっているのも事実である。

話は変わるが、学校に勤務することになって良かったのは、再び生徒と趣味のテニスができることである。

本来は、中学から始めた軟式テニスだが、高校では硬式テニスをする予定だった。しかしクラブが軟式テニスしかなく、仕方なく継続して同じクラブに入ったのだが、当時の高校では、受験勉強をすることを押しつけられていたせいもあり、勉強せずにクラブだけやっていたら、たまたま高総体で優勝しインターハイへも出場することができた。その後、しばらく止めていたが就職してからは、たまに練習する程度であったものが冒頭にも記した、鹿町工業高校では、独り身だったということもあり、仕事よりもソフトテニス（当時は、軟式テニスと言っていた。）にはまってしまい、朝は７時前の早朝練習から放課後の日が暮れるまで生徒とボールを打っていた。そのため先輩同僚からこの人は大丈夫だろうかと心配されもした。それでも異動までの６年間指導を続けた結果、高総体で初めての優勝、翌年の連続優勝という記録を残すことができたことはメモリアルであり、当時の生徒達に感謝している。クラブだけやれれば先生になってもいいかな、と思ったものだ。その後、長崎では３０才を過ぎて県庁ローンテニスクラブに入り硬式テニスに転向してから２５年以上も続けていることになる。テニスも奥が深く、なかなか上達しないのだが、それでも国体の前年に開かれるプレ国体の全国都市対抗テニス大会や全九州テニス選手権など年齢別の大会に出場させてもらっている。できるだけ、生徒と練習する機会を見つけ、テニスの面白さと「勝つ」喜びを教え、再び高総体での優勝をともくろんでいるのだが、事務長としてまず手始めに、テニスコートの整備を考えているので、ぜひ担当者にこの紙面を見ていただきたいと思う。ぜひ予算をお願いしま～す！

長崎明誠高校に赴任しました

長崎明誠高等学校　大　野　公　一

７時に車に乗り込んでエンジンを掛ける。朝も少しだけ早いせいかまだ混んでいない道を走り２５分ほどで学校に着く。エコカー補助金をもらい車を買い換えて２年４か月ほど経つが、通勤で車を使うようになり、走行距離もやっと１万キロを超えてエンジン音も心地よくなったような気がする。２０年振りの車通勤は快適である。

この４月から新任の事務長として勤務をしている長崎明誠高校は、ご存じのとおり、平成１０年に本県初の総合学科校の一校として新たな出発をし、１４年目を迎えた学校である。「夢ありてこそ」と全国でも珍しい題名のついた校歌は、さだまさしの作詞・作曲でもある。「自主・自律」を校訓に掲げ、生徒が幅広い開講科目の中から自分の興味関心に応じた科目が選択できるという総合学科の特色を活かし、生徒１人ひとりの希望進路の実現に努めている我が校である。

管理棟・教室棟は古く、グラウンドは広く、課題も多く抱えているが、その中にあって、図書室だけは自信をもってお勧めできる。運営面、空間作り、仕掛けともほぼ理想型に近いのではないかと密かに思っている。機会があれば是非ご覧いただきたいと思う。

また、運動部活動が非常に盛んで、これまでの取り組みが高く評価され、「平成２６年長崎がんばらんば国体」の拠点校として５つの競技（柔道女、ボート男女、弓道男女、ゴルフ男女、なぎなた女）が強化校の指定を受けている。６月に開催された県高校総体において優勝した柔道女、ボート男・女のほか、弓道男、なぎなた女など多くの生徒が全九州大会やインターハイへの出場を果たし、インターハイでは２人の生徒が個人種目でそれぞれ２位、３位入賞という素晴らしい成績を収めてくれた。派遣費のやりくりは大変だが、生徒の活躍はうれしいものである。

さて、事務長になって半年が過ぎ去っていこうとしている。これまで県立学校に勤務したことがなかったので当然と言えば当然なのだが、「事務長さん」に直に仕えた経験がなく、故に「事務長さん」なるものの仕事ぶりに間近で接したこともなく、見よう見まねもままならず、しかも実務をこなしていくためには、あまりにも知らないことが多すぎるという現実を突きつけられてもいる。

試行錯誤が続く毎日ではあるが、県教委でかつて仕えた尊敬する上司（某事務長さん）の仕事ぶりをお手本としながら、１年が終わるまでは今の自分なりのスタイルでやってみようと考えている。印鑑だけをひたすら押し続けているだけの日々とはおさらばし、初心者運転のマークが１日でも早く取れるように、とにかく頑張っていくしかないのだなと思う今日この頃である。

奈留高校に赴任して

奈留高等学校　山口美登志

４月に新任事務長として赴任し、はや５ヶ月。同じく新任の校長先生らと協力しながら日々校務に勤しんでいます。

奈留高校は、ご存じのとおりユーミンの「瞳をとじて」を愛唱歌にしています。その歌碑を東京あたりからツアーの観光客がしょっちゅう見に来るのですが、その度にうちの生徒達は、平日でも出ていって歌碑の前で合唱してあげるのです。このサービス精神にはびっくりしました。

本校は平成２０年度から、宇久高校、北松西高校と並んで小中高一貫教育を実施しています。高校のすぐ下に、五島市立奈留小中学校があります。４月に新築された白亜のホスピタル風の建物で、空中に延びたこれまた白い渡り廊下で高校とつながっています。小中学校と高校は自由に行き来ができるようになっていて、相互乗り入れで先生方やＡＬＴが授業に出かけ、教科や領域において連携した取り組みをしています。また三大行事として、歓迎遠足、体育大会、百人一首大会を小中高合同で実施しています。年間を通して開催される小中高一貫会議には、私も出席し、なぜか上座に座らされます（一応、事務局になっている）。おかげで小中学校の先生方とも自然と親しくなりました。小中高で一地区なので、ここには我々の子供の頃のような、地域ぐるみの子育て社会がまだ残っています。このような過疎地にあってはまさに子供達は宝です。何をするにもＰＴＡや地域との協力体制の大切さを実感しています。さる７月１０日には、奈留島の玄関口にある「前島トンボロ」の漂着ゴミの清掃活動が行われました。「トンボロ」とは「陸繋島」ともいい、干潮時に陸地と島が干上がった海底で繋がる現象を言います。青い海と白い道のコントラストがとても美しい場所です。しかしここが、漂着ゴミの格好のたまり場となっています。地元ではＮＰＯの主催で、年に一度清掃活動が行われているのですが、これに高校生も参加します。私も参加しましたが、これがかなり大がかりで大変でした。まず現地まで海上タクシーで移動するのですが、もともと船着き場がないので、ＮＰＯが事前に浮き桟橋を製作し現地まで曳航して設置します。浮き桟橋に乗り移ったら、桟橋をロープでたぐり寄せて上陸です。

さて遠目にきれいな「トンボロ」は砂浜ではなく、石がごろごろで漂着ゴミはハングルや中国語の粗大ゴミばかり、皆、炎天下にお昼までがんばりましたがよく誰も熱中症にならなかったものです。お昼のカレーとそうめんはとてもうまかったです。お昼から今度は船でゴミ運び。陸揚げして２ｔトラックで４台満タンの大漁でした。島を去る時は多少波が出て浮き桟橋がゴミと人の重みで沈み掛け、生徒はずぶ濡れでしたが、見返す浜は全くきれいになりました。また８月の終わりには、小中高合同でＰＴＡ主催の除草作業が行われました。体育大会に備えた環境整備ですが、これが除草作業というような代物ではなく、チェーンソーまで使って急斜面を伐採するもので、私を含めて具合が悪くなる人が続出、伐採予定の半分ぐらいで中止となりました。しかしその後、昼食会という名目の飲み会が始まり、皆、あり得ないほど体力を回復させていたのはなぜでしょうか。事務も体力勝負です。単身赴任で食事もテキトーですが、油ものを控えるため昼はおにぎり弁当を作っていってます。ＯＦＦはひたすらウォーキングです。平日７ｋｍ、休日は１５～２０ｋｍぐらい歩きます。ですがその後ビールに手が出て、１杯が２杯、２杯が・・・こればっかしは・・・

随想　ハウステンボス16日間インターンシップ

波佐見高等学校　校長　下春　雄二

人は仕事をすることで成長し、与えられた責任を全うすることで人格が磨かれるというのは、真理だと思う。これは、銀行に３３年間勤務し、そのうち２年間は社長として旅館再建に取り組み、現在は県立高校の校長の仕事をしている、民間出身の私の実感でもある。

自由と豊かさの中で育った生徒たちを見ていると、自律と非自律の両極に広がっているように感じる。自律的に自分の目標を立てて努力することができる生徒がいる一方で、基本的な自己理解や自己管理ができず何事にも意欲がない、自己肯定感に欠ける非自律型の生徒がいる。中学校での学習が不十分だったとか、家庭環境が厳しかったなどの要因により、褒められた経験も少なく、自信のない生徒たちは、「なぜ勉強しなければならないのか？卒業して仕事ができれば、それでいいさ。何とかなる」くらいの気持ちでいる。

私は、そのような生徒たちが卒業して働き始めてから「勉強しとけばよかった」と後悔したり、すぐに仕事をやめたりするくらいなら、高校在学時から「働くこと」を実体験して仕事の厳しさを感じさせる方が、彼らにとっては有効で、早道だと思っている。

波佐見高校では、ハウステンボス㈱様の協力をいただき、２日間の集中講義プラス１４日間実習の、長期インターンシップを実施している。この夏までで３回実施し、参加者総数は７０名をかぞえる。

１６日目の修了式で読む生徒たちの感想文は、

○立ちっぱなしで同じ事を繰り返す仕事の大変さが分かった
○最初お客様を目の前にして何もしゃべれなかった
○仕事をなめていた
○お客様から「ありがとう」と言われて嬉しかった
○苦労して得たお金は大事にしたい
○この経験を将来に生かしたい、などである。どれも長い実習をやり遂げた達成感に満ちている。

インターンシップ終了後には、大変有難いことに、ハウステンボス㈱人事部様から個人別の評価書が送られてくる。これを生徒自身が記入した自己評価と比べてみると、生徒の自己理解の状況まで把握できるオマケまで付いていて、その後の進路指導に役立っている。

世界がガラガラと音を立てるように大きく変化している今、働くことに意欲のない若者が増えてしまうのでは、日本の将来が危ういと考える人は多い。私は、学校の外にいる、教育に関心の高い人の協力をいただきながら、普通科のキャリア教育を充実させたいと思っている。

編集後記

今年は、３．１１の東日本大震災の発生が日本全体を大きく揺るがせました。電力不足による「節電」の取り組みもなされました。猛暑による熱中症対策に苦慮された学校もあったのではないかと思います。

当初は地理的に離れた地域のことで、九州の地では直接的な影響はないのではないかと思っていたら、時間が経つにつれ物品の納品等に影響が現れ始め、他人事ではない未曾有の災害であることに気付かされました。実際に現状を見ましたが、その惨状は、言葉では言い表せない状況でした。自然災害の怖さに身震いし、涙が出てきまして、やるせなく、虚しい気持ちになりました。復興支援の取り組みなど、まさしく一人では小さい力であります。がしかし、多くの人が集まれば、より大きな力が生まれるような気がいたします。田渕会長さんが寄稿に述べられていますように、学校を取り巻く多くの諸問題への取り組みも、一人ではなく「みんな」で取り組んで行ければより良い方向に行くのではないかと思います。

事務室経営も非常に難しく、厳しくなっています。本紙及びメルマガ・ホームページを大いに利用していただき、その一助になれたらと思います。会報誌「ばってん」第30号発行にあたり、日々多忙な中で原稿執筆をいただいた方々に深く感謝いたします。

なお、本会報誌についてのご意見、ご要望及び次号31号の原稿寄稿について、随時広報部にて受け付けていますのでよろしくお願いいたします。(M)